HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	シドニー滞在記 : 7カ月間のノマド生活を通じて
Author(s)	森, 傑
Citation	センターリポート, 48(4), 20-25
Issue Date	2019-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/83945
Type	journal article
File Information	Cent Repo.207.20-25.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

海外訪問記

シドニー滞在記
～7カ月間のノマド生活を通じて～

森　傑
北海道大学大学院工学研究院
建築都市空間デザイン部門建築計画学研究室・教授

1. はじめに

筆者は、科学研究費補助金・国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）の採択を受け、2016～18年度の3カ年の研究期間において、2018年3月から9月末までシドニーのマッコーリー大学人文科学部人文地理・都市計画学科の客員教授を務めていた。実際は7カ月間通してシドニーで生活していたわけではなく、ひと月の約3週間がオーストラリア、残りの1週間が日本とその他の国でのフィールド調査や国際会議という内訳で、週単位で移動し続けているというノマド生活であった。

本稿では、筆者が滞在中に特に関心を持った事例やトピックについて紹介したい。全体を通して筋の通ったレポートではなく恐縮だが、今日のシドニーあるいはオーストラリアの新鮮な情報を多少提供できれば幸いである。

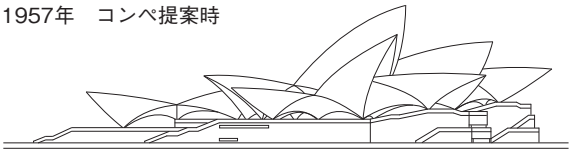
2. オペラハウス

シドニーといえば、建築を専門としている人でなくとも真っ先に思い浮かべるのはオペラハウスだろう（写真1）。世界遺産でもあるこの建物は、1956年に国際コンペが実施され、200を超える応募の中から最終的にヨーン・ウッツォンの案が選ばれた。当時ほとんど無名であったデンマークの建築家であるウッツォンによる提案は1次選考で落選していたが、審査員の一人であるエーロ・サーリネンが強く支持し最終選考に復活させたという経緯はよく知られている。

オペラハウスの特徴は何と言っても鳥が羽を広げたような真っ白い外観であるが、最初のコンペ案ではもっと水平に広がった形態であった（図1）。複雑な空間・屋根形状は技術的・経費的にも見通しが立ちがたく、何度も設計変更を重ね、1959年の着工以降も建設費

写真1　Mrs Macquaries Point から望むオペラハウス

1957年　コンペ提案時



1962-3年　最終実施案

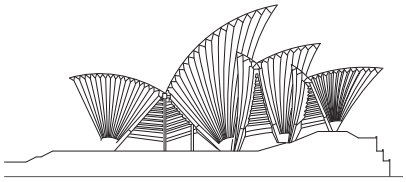


図1　オペラハウスのプロポーション
(Rowland Mainstone: Developments in Structural Form, Routledge, 2001をもとに筆者が作成)

が膨らみ続け、1973年の完成は必ずしも市民から歓迎された中で迎えたわけではなかった。しかし今日では、世界から愛されるシドニーで一番のランドマークとして、そして現役のホールとして、一年中朝から晩までにぎわっている（写真2）。

建物に近づいて外装をよく見てみると、とても美しい装飾的なタイルのパターンであることに気づく（写真3）。近年市民や観光客に人気なのが、この美しい屋根面を活用したプロジェクションマッピングである。例えば、Vivid Sydney でのそれが有名である。Vivid Sydney は毎年5～6月に開催される光と音楽の祭典であり、2018年で10年目を迎えた。筆者が滞在中に特に楽しんだプロジェクションマッピングは、2017年6月から1年間の毎日日没と19時の2回、先住民アボリジニ・アーティストの作品を映し出していた Badu Gili である（写真4）。Badu Gili は水の光を意味し、ダイナミックであるものの繊細な表現に感動した。

3. マイノリティ

オーストラリアの歴史の中で、アボリジニは大きな存在であることは言うまでもない。イギリスを中心とするヨーロッパ人による植民地化の以前からオーストラリア大陸やその周辺諸島に居住していた先住民とその子孫であり、今日では社会的にも文化的にも様々なフィールドで活躍している。

アボリジニという呼び方は最近では避けられる傾向にあり、Aboriginal People や Indigenous Australians（オーストラリア先住民）という表現を耳にすることが多い。差別的な歴史の中で用いられてきた呼称でもあることから、先住民の中での多様性も配慮した意識の表れであると言える。

筆者がここ数年オーストラリアへ幾度も渡航し、テレビやインターネット等を通じて日常の情報に触れる中で特に強い印象を持ったのが、マイノリティに対する社会意識の高さである。流刑植民地から連邦国家へ至るまでのオーストラリアの歴史は複雑で、その過程では支配者と先住民あるいは移民同士の軋轢（あつれき）や衝突を経験し続けてきた国である。おそらくその反動が、良くも悪くも今日のマイノリティへの意識の高さにつながっていると思う。

普段の生活の中でも多くの気づきがあった。例えば、新しい駅舎や公共施設に増えて

写真2　オペラハウスのホールの内観

写真3　装飾的な外装タイルのパターン

写真4　Badu Gili のプロジェクションマッピング

いるのが個室が並んだユニセックス（Unisex）仕様のトイレである。そして、多目的トイレのサインには日本との意識との差が顕著に表れている（写真5）。最初にこのサインに気づいたのは5年以上も前になるが、「RH」あるいは「LH」という表記はそれぞれ Right Hand と Left Hand の略である。つまり、利き手によっての使いやすさがトイレへ入る前にわかるようになっている。

ユニセックス的な考え方（gender-neutral）は、デパートなどのおもちゃ売り場へも及ぶ。いわゆる男の子用と女の子用という分類での商品の陳列を禁止するものである。性別をめぐる固定観念（gender stereotyping）に関する研究レポートがきっかけで、オーストラリア全州に広まってきている。また、スーパーでは Quiet Hour（刺激の少ない静かな時間帯）という取り組みも始まっている。自閉症の子どもとその家族が来店しやすいように店内の照明の明るさを抑え店員の作業も控える時間を設けるというものである。

ただ、先に“良くも悪くも”と書いたが、実は疑問に思うような議論もある。メルボルンでは交差点での歩行者横断の信号機の人型サインについて、スカートを着た女性の図柄にするべきだという意見が真面目に議会に提出され、いくつかが既に交換されている。男女平等の改善につながるということらしい。スカートをはかせた方がより男女区別を意識させることになると思うが、いかがだろうか。

4. バブル景気

オペラハウスは誰もが知っているランドマークであるが、建築分野の方ならサーキュラーキーからロックスのエリアを散策すれば必ず目にとまる建物がある。Sirius Building である。非常に特徴のある形態は日本のメタボリズムの影響を受けており、1979年に建てられた公営住宅である（写真6）。既に売却が決定され、昨年12月に最後の住人となる91歳の女性が退去した。

写真5　ユニセックス仕様の公衆トイレのサイン

写真6　2017年末に閉鎖された公営住宅の Sirius Building

Sirius Building はもともと、1960～70年代に今日の観光名所となっているロックスエリアの再開発により移転を余儀なくされた住民のために建設された。そして2015年以降の景気の高まりを背景に、まさにシドニーの一等地であるこの場所は再び開発対象として注目されることとなった。NPO による反対運動が起こり、ニューサウスウェールズ（NSW）州遺産評議会も保存すべきとの見解を示したが、NSW 州政府はそれらを退け売却の判断を下した。購入を募る看板には「Flexible zoning allowing multiple uses」とまで書いてある（写真7）。

NSW 州政府の立場にしてみれば、この物価高・地価高騰の中で、一等地であるにも関わらず収益の見込めない公営住宅を抱えているよりも、規制を緩和してでも早く売却したいというのが本音である。西洋人が初めてオーストラリアに入植した場所であるロックスが、どんな新たな姿に変わっていくのか非常に興味深い。

シドニーをはじめとするオーストラリアの主要都市はバブルに似た景気で、特にメルボルンは先進国の中でトップ5に入る人口増を続けている。筆者の滞在中も、連日のように不動産価格の上昇がニュースで報じられていた。

メルボルンはここ数年で、特にフリートラムゾーンの景観が大きく変わってきている。サザンクロス駅やクイーンビクトリア・マーケットの周辺には、カラフルなカーテンウォールの高層集合住宅が所狭しと並んでいる(写真8)。しかし、実際の購入者が居住しているケースは多くはなく、いわゆる投資用マンションがほとんどらしい。常にエントランスまわりはスーツケースを持った旅行者が集まり、一見して住民ではないと判断できるどこの誰だかわからない人々が出入りしている。

無料で乗車できるトラムは確かに観光客にも優しいが、常に朝の通勤電車並みに混み合っている。直感的には、都市のアメニティのバランスが崩れてきているように思う。メルボルンはここ数年続けて英国エコノミスト誌で世界一住みやすい都市に選ばれているものの、この先はその座が揺らぐのではないかと感じている。

5. グレン・マーカット

メルボルンでは、グレン・マーカット氏が設計し2016年に竣工した Australian Islamic Centre を見学した（写真9)。グレン・マーカット氏は2002年にプリツカー賞を、2009年には AIA ゴールドメダルを受賞したオーストラリアを代表する建築家である。この建物はコミュニティファンドによるイスラム教のモスクであり、メルボルン郊外の Newport 地域のコミュニティセンターとしての役割も担っている。

グレン・マーカット氏は、ムスリムと非ムスリムの双方のためのコミュニティ空間として、これまでの伝統的な様式からオーストラリアの歴史的・文化的な文脈に沿って新たに展開したモスクのあり方に挑戦したという。

写真7　Sirius Building の購入を募る看板

写真8　メルボルンに立ち並ぶ高層集合住宅

写真9　Australian Islamic Centre の外観

写真10　Australian Islamic Centre の男性用の昇降口

駐車場からのアプローチから続く正面エントランスが、まるで日本の小学校の昇降口のような雰囲気であった（前ページ、写真10）。1階の男性のための礼拝空間は昇降口とガラス戸のみで仕切られており、視覚的にオープンなのが特徴的である（写真11）。一方、女性は男性用の昇降口は通らず別の入り口から2階の礼拝室へ階段で上ることになっている。

さて、マッコーリー大学の客員教授としての滞在の最終日、Glenn Murcutt International Master Class の講評会へオブザーバーとして参加する機会を得た（写真12）。2週間での短期集中による設計演習であり、様々な国からの約20名の参加者が著名建築家の指導のもと150時間にもおよぶスタディに取り組むものである。また、このプログラムにはグレン・マーカット氏が設計した住宅を見学できるという特典もつく。

グレン・マーカット氏の講評を直接拝聴することができたわけだが、彼の非常に物腰の低い語り口が印象的であった。大建築家というと高尚な小難しい話をするのかと先入観的に思ってしまうところだが、彼はほとんど観念的・概念的な説明をしなかった。むしろ、ベッドの寸法がまずいとか、模型とパースと図面のスケールが一致していないといった設計としてごくごく基本的なポイントを逐次指摘していた。そのような基礎的な指導があるからこそ、大建築家を前にした参加者は気負うことなくプレゼンでき、結果的に各参加者・各提案のポテンシャルを引き出していくような議論へとつながっていたのだと思う。

6. おわりに

以上、シドニーを中心にいくつか話題を提供してみたが、滞在の本来の目的である研究について全く触れていないので、最後に少しだけ紹介したい。

筆者は、東日本大震災で被災した気仙沼市小泉地区の集団移転に携わったことを機に（本誌2012年182秋号参照）、コミュニティ移転を主要な研究トピックの一つとして注力してきている。オーストラリアのクイーンズランド州ロッキヤーバレーでは、東日本大震災と同じ2011年に起きた大規模な鉄砲水被害により、オーストラリア史上初の自然災害による集団移転事業が実施された。

写真11　Australian Islamic Centre の男性用の礼拝空間

写真12　Glenn Murcutt International Master Class の講評会

実は、災害によるという括りを外せば、広義の住民移転やコミュニティ移転はこれまでも世界各地で数多く行われている。前述の Sirius Building も再開発に伴う住民移転である。マッコーリー大学では、アジア太平洋地域における大災害や都市開発そして気候変動によるコミュニティ移転に関する国際共同研究のさらなる展開を目指して、特に人文地理学分野の研究者を中心に情報交換と議論を重ねた。その成果として例えば、ベトナムでのダム開発に伴う先住少数民族の集落移転や、フィジーでの気候変動・海面上昇に伴う居住地消失に備えた事前移転などのフィールド調査も始まっている。

海面上昇による水没などといっても、日本での日常生活の中ではほとんど実感が湧かないことだと思う。先日イタリアのヴェネツィ

アへも行ってきた。10〜12月のヴェネツィアは「アクアアルタ（acqua alta）」と呼ばれる高潮が発生する。ヴェネツィアの地盤沈下と気候変動による海面上昇で、毎年のように街の至るところで浸水被害が出る。滞在期間中にも潮位が上がりはじめ（写真13）、帰国直後の10月29日には大雨と強風が重なって1.5m以上の記録的な高潮となり、観光名所のサン・マルコ広場も閉鎖されるほどとなった。

近年の全国各地のゲリラ豪雨や北海道胆振東部地震による土砂災害、液状化による地盤沈下などを見ていると、“いま普通に暮らしているところが住めなくなる”という事態も決して非現実的な認識ではないだろう。いずれ機会があれば、住民移転・コミュニティ移転をテーマに本誌にて話題提供ができればと思う。

写真13　2018年10月27日のサン・マルコ広場の冠水